

新工場が完成、鋼製事業部新設 個人向けビジネスを見据える

日伸鉄工建設(東京)



新工場外観

東京都葛飾区のMグレードファブ、日伸鉄工建設(金本貴範社長)はこのほど、鋼製事業部を新設し、新工場2階でオーダーメー

ド家具製作を開始した。

同社は、旧日本社工場隣接地を200年に取得し、ヤードとして活用してきたが、生産能力拡充や横持ち・保管の負担軽減などを目的に同地に新工場を建設。昨年10月に竣工し、事務所機能なども移転した。



鋼製事業部の製作、展示スペース(2階)

主な特徴は、町中の工場として、騒音に配慮したALC外壁や鉄骨をあえて見せる意匠として活用する工夫などがあるが、最もユニークなのは2階の新規事業

完成した新工場の概要は、敷地面積約660平方メートル、地上3階建て、延べ面積約990平方メートル。1階は鉄骨加工、2階は新設した鋼製事業部による個人向け鋼製家具製作作業と展示のためのスペース、3階は事務所および図面業務のスペースとして使用している。

金本社長は新工場の建設にあたり、「コロナ禍を契機に事業の柱を増やす必要性を感じていた」という。多角経営の方向性を高める一方で、「かけ離れた分野では中途半端になり、失敗した事例も知っているので、鉄と関連する業種を模索し

用スペースだろう。

た」とし、「企業を客先とするわれわれのビジネスは国内の景気や情勢に左右されやすい。そこで個人をターゲットにした事業を検討した」と語る。

建設を決意したタイミングについては、「仕事が忙しい時期はしっかりと考えることができない。現状の物価高は想定外だが、先送りしても建設コストが反転する要素もなく、補助金を最大限活用できるタイミングで決断した」とし、新工場の建設には新規事業を軸にして、経済産業省中小企業庁の「事業再構築補助金制度」の活用を決めた。

また、設備の投資も中小企業振興公社や中小企業団体中央会、東京都などの各助成制度を最大限に活用した。鋼製事業部門関連では

ガスレーザー溶断機、精密コールドソー、200アンペアの溶接機、レーザー溶接機、サンドブラストなどの機材を設置した。さらに工場全体では、大組立溶接ロボットや組み立て用治具、太陽電池と蓄電システムなどを設備している。

鋼製事業部は現在、机と鉄骨、作業台、表札、シューズボックスなどを商品化。専用スペースを解放したワークショップなども検討しているという。

さらに、同社は26年度前期の性能評価でHグレードの取得を目指している。金本社長は「都内には大型物



製作した机といす

件に伴う付帯金物などがあがり、都内のファブとして受注できるよう昇格を決めた。ただ、仕事量を追うためだけでなく品質管理体制の強化が目的」という。「新規事業を含め、この土地で地元根差した事業を展開し、地域に愛される企業になりたい」と経営方針を語る。